

令和7年度 第3回 府市トップミーティング

日時：令和7年12月23日（水）16：00～17：00

場所：京都市役所 正庁の間

○松井市長

知事、今日は高病原性鳥インフルエンザ等に係る京都府家畜伝染病等対策本部会議直後に、大変お忙しいところをありがとうございます。それでは、今年度3度目の府市トップミーティングを開催させていただきます。西脇知事をはじめとして、京都府の皆様方には御足労いただき、またいつものように御準備に御協力いただきまして誠にありがとうございます。

トップミーティングは、今日、事前配布資料も皆様に配らせていただいておりますが、昨年度から始まって今回で6回目ということで、年に複数回数、機動的に開催し、未来志向・成果重視型で行ってまいりました。知事とこの間お話させていただいてきたことは、迅速に検討を始め、そして、知事と市長だけが動いても、府庁・市役所は動きませんので、しっかり府庁の職員の皆様方、市役所の職員の皆様方に、実務者の方々にも、同じ思いを共有することが大事だなということで、取組を進めさせていただいてきたわけであります。

今回は、この2年間の成果も皆様の方に配布させていただいているので、御覧いただき、もし、これ今どうなっているのかということであれば、後ろに連絡先も示しておりますので、是非、御覧いただけたらありがたいと思っております。

中でもですね、一番の成果の1つは高校生の探究学習。これ、私と知事がいろんなところで毎日のように顔を合わせる訳ですが、数時間にわたって御一緒させていただいたというのは、今回も20日の土曜日、宝が池での京都探究エキスポ2025で御一緒させていただいて、大切だったのは知事と私が一緒であるということだけではなくて、たくさん的高校生が、府立高校・市立高校の高校生が、共に学び、そして、そこにいろんな大学生であるとか、学校の先生方であるとか、中学生であるとか、インターナショナルスクールの生徒さんも来てくれてですね、非常に広がりを持ったというのが、今回の催しだったなと私は感じているところであります。探究学習の本数もですね、ポスターが226本ありました。それから、テーマもですね、アントレプレナーシップ、伝統産業・古典から見た地球環境とか、京都のまちの強みを生かして本当に高校生が、自分たちの興味関心から発する、引き出されるプログラムが整備された。これは講師の選定もですね、生徒の実行委員会が希望を出してきて、知事と私がいろいろコネクションを辿ってですね、お願いしたというようなこともあります。昨年度の第3回トップミーティングで、高校生の学びをサポートできるよう教育委員会、学校だけではなくて、市役所・府庁の関係部局の連携を進めるというようなことを掲げて、それが、具体的に教育委員

会にも浸透してですね。それで何よりも生徒さんの意欲を刺激したっていうのは大きかったなと思います。

これからの議論になりますけれど、今後の探究学習の方向性としてはですね、京都の持つ人材や文化、伝統などを生かした取組を積極的にPRしながら、更なる取組をどうしていくか。今日も、「トビタテ！留学JAPAN拠点形成支援事業」の議論に朝からなりましたけれど、今日もその辺りも含めまして、府市の施策の交じり合いになるような議論ができればと思いますので、知事、本日もよろしく申し上げます。一言よろしくお願ひいたします。

○西脇知事

まずは年末の慌ただしい時期に素晴らしい設えを御準備いただきました松井市長をはじめ、京都市役所の皆さんに心から感謝を申し上げます。

こういう格好をしておりますが、本日は亀岡市内の養鶏場で、高病原性の鳥インフルエンザの疑い事例が発生したということで、15時から第2回の京都府家畜伝染病等対策本部を開催いたしました。遺伝子検査で陽性が確定した場合には、マニュアルに基づきまして、直ちに防疫措置を講じるということにしておりますので、関係機関の皆様には、御協力をお願いしたいと思います。また、府民の皆様におかれましては、鳥インフルエンザに感染した鶏肉とか卵が流出することはないので、安心して消費をしていただきたいと思っております。

私からも配布資料の中にあります成果を簡単に、2つについて触れます。1つは、京都版ミニ・ミュンヘンということで、昨年度は八幡と福知山でやったんですが、今年度は京都市との府市連携ということで、梅小路公園でやりまして、小中学生約220名が事前の準備企画段階から、そのサポートに高校生と大学生を合わせて約55名参加。当日は延べ6,000名もの来場があったということで、大変な賑わいございまして、子ども市長に「どんなまちに住みたいか」と聞いたら、「こんな子どもの笑顔が溢れるまちに住みたい」とか、高校生のサポートをした人からは「自分も子どもが好きになって、子どもがほしくなった」みたいなことを言っただけで、ある程度の成果につながっているかなと思っております。聞くところによりますと、11月には、これに参加した修学院の児童館が、地域の子どもと一緒に小規模なミニ・ミュンヘン、ミニミニ・ミュンヘンということなんですけれども、やっていただいたということで、波及していることを大変嬉しく思っております。

それから大学政策を1つだけ申しますと、前回のトップミーティングで松井市長の方から焚き火を囲んで、フラットな場で大学連携について話し合えないかという話が有りまして、12月8日にこの市役所前で焚き火を囲んで、フラットな打合せということで、これまでから教養課程で共同していた工繊大と府立医大と府立大に、鴨川のそばに移って来られた京都芸大を加えて、4大学の学長と市長と私とで、それから教職員とか学生

の方も参加した形で、いろんな話をさせていただきました、結論としては、この4大学でこれからもいろいろ連携してこうということで、当日もいろんな知恵が出ました。

本日もそうした具体的な成果につながるような議論ができればと思っておりますので、市長、よろしくお願いいたします。

○松井市長

はい、ありがとうございました。こうやって見るといろんなことありましたね。五山の送り火を、ちょっとハラハラしながら2人で。

○西脇知事

そうですね。送り火だけ報道されたということがございました。

○松井市長

そういうことは多いですね。それはともかく、本日も自由に、ライブ感を持って進めていきたいと思います。

最初にですね、冒頭に前回のトップミーティングで議論させていただいた、奨学金の返済支援制度の拡充について議論をしたいと思います。これは京都府が実施されている、就労・奨学金返済一体型支援事業ということで、地域企業に京都で学んだ方々が、しっかり定着するような奨学金面での支援を府がやっておられて、我々も広報でこれまで協力はしてきたんですけど、もう少し京都市としてもですね、やっぱり（府内の）6割が京都市内の企業ですので、支援できないかということで、今、若者の奨学金返済の負担軽減につながるように、京都の地域企業に勤めた場合、財政支援を行う措置をですね、まさに予算編成真っ只中でありまして、検討を重ねているところであります。これが実現した時には、中小企業・地域企業も人材確保、学生の京都定着。今、16.6%しか最新の数字で言うと京都府下に留まってくれていないので、これに向けてしっかり支援を厚くして、なおかつ、府市連携でいろんな形で知事と私も出て行ってですね、PRをしていきたいと思います。企業の方々にこれを、是非、取組を、広げていきたいと思っております。そういう意味で、私どもまさに今予算措置を検討中ではありますが、この辺りについて、知事はどのようにお考えでしょうか。

○西脇知事

前にも一度御提案いただいた話なんですけれども、元々この奨学金の返済支援制度、私が知事になった時に既に存在していて、すごい良い制度なのにあまり利用されてなかったのが利用拡大が大きな課題で、なおかつ一部制度も拡充させていただきましたので、京都市で事業を実施していただくことが、もしあればですね。先程から言っています府内の6割の中小企業が集積しているということで、制度導入のハードルが下がりますの

で。それから学生の就職選択の幅も広がるし、それから府市連携の下ですね、やっぱり京都企業が働きやすい職場だということも、学生の皆さんにアピールできるということで、これは、京都市の参加は非常にありがたいと思っています。

やっぱり今、中小企業の方、本当に厳しい経営状況の中だけでも、人手不足ということで人材確保に苦労されていますので、より多くの方にこの制度を利用していただくのは非常に重要だと思っていますので、例えばですけど、来年度、我々は京都ジョブ博ということでやっております、学生と京都企業の出会いの場なんですけれど、そういうところに、制度を導入している企業と利用している学生さんにも参加していただいて、パネルディスカッションなども行って、アピールできたら良いのかなということも思っております。とにかくこれ、利用者から非常に評判いいですし、企業からも当然評判がいいということで。加えまして、我々も、もう少し制度のニーズとかも分析はしないといけないと思っていますんですけども、それから他の市町で、追加でやっているところもありますので、そういうところの調整と、導入企業の状況も考慮したうえでなんですけれども、場合によっては、我々も今の制度についての拡充についても検討しても良いのかなと私は思っています、まだ具体的なアイデアはないですけども。一番重要なのはアピールだと思っていますけれど、制度面でもし足りないところがあれば、併せて検討していきたいと思っています。

○松井市長

はい、大変ありがとうございます。予算査定真っ只中で、知事・府の協力を得られるかどうかで、この予算査定にも影響するところなので、今の力強いお言葉をバネにして予算査定で、しっかり我々としても何らかの形で財政支援をして、それが企業とか、御本人、学生さんで就職される方々の負担軽減につながるように我々も取り組みたいと思いますし、しっかりと、もし制度が実現できた時には、一緒に今仰っていただいた機会も使わせていただいて、広報にも努めていきたいと思います。

それでは、今回、第3回府市トップミーティングの合意事項として、京都市による事業実施を契機にして、我々が追加でこの制度に取り組むことを1つの契機にして、導入企業の更なる拡大を図るために、学生と京都企業が出会うイベント等を通じて、知事・市長自ら本制度を紹介するなど活用を働きかけるとともに、府域全体の動向も踏まえて制度拡充に向けた検討を開始すること、を奨学金返済支援制度の拡充に関する本日の合意事項とさせていただいてよろしいでしょうか。

○西脇知事

はい、よろしく願いいたします。

○松井市長

ありがとうございます。1つ目の合意事項ができました。

それでは続いて、最近ちょっと火事が多くなってまして、市内でもいろんなバッテリーの発火とかあるのですが、全国的にも地震やあるいは林野火災など大規模な災害が、頻発しておりまして、前回のトップミーティングでも話題になった、消防体制の強化について、知事の方から御発言をお願いできますでしょうか。

○西脇知事

市長の仰るとおりで、大船渡の林野火災と佐賀関の市街地の火災も有りました。それから昨年は、南海トラフ地震臨時情報巨大地震注意が初めて出て、今年もですね、青森県東方沖地震の発生を契機として、北海道三陸沖の後発地震注意情報が出たということで、なんとなく巨大地震の脅威もですね、ひしひしとを感じるようなところがあります。能登半島地震でもそうであったんですが、やっぱり災害発生時は、上空からの情報収集や火事の場合は消火、それから人員とか物資の輸送ということで、もうヘリコプターの活用というものは必須だと思っております。今年度、京都府では、京都舞鶴港のふ頭に、大型ヘリが離着陸できるヘリポートを、あと孤立する可能性がある舞鶴市と綾部市で、ヘリポート整備する市の支援をしているということなんで、やっぱりこの消防防災ヘリコプターの2機の同時運航体制の確保をはじめとする、防災航空体制の強化につきましては、是非とも、京都市とより一層連携を深めて、それから府内のその他の市町村の協力もいただいて、消防防災ヘリコプターに係る人員体制とか整備の拡充を進めていきたいと考えておりますが、この点について松井市長のお考えもお聞かせいただければありがたいと思います。

○松井市長

ありがとうございます。全く賛同でございまして、京都市としても、京都府と共に消防航空体制の強化に取り組んでいきたいと考えております。京都市と府内の消防本部との連携については、消防指令センターの共同運用に向けた取組というのを、既にいろいろ取組を始めていまして、消防ヘリコプターに関する研修会とか合同訓練の実施など、一層その取組が強まっているところでありまして、これに、京都府さんとともに、消防航空体制の強化を進めることによって、京都市を含めた、京都府全域の災害対応力・消防力・救急力が一層高まると考えております。

従いまして、今の知事の御発言を受けまして、よろしければ本日の合意事項として、消防体制の強化に向けて、京都市消防ヘリコプターの2機同時運航が可能となるよう、運用面、あるいは人員体制面での具体的な内容について、府市で取りまとめていくということ、消防体制の強化に関する本日の合意事項とさせていただきます。ありがとうございます。

近年の災害発生の状況を踏まえ、できるだけ早期に実現したいと思いますので、是非これ府市、それぞれ実務も含めて、取組をお願いしたいと思います。

○西脇知事

ヘリコプターの話はずっとですね、いろいろな経過を踏まえながらですけれども、検討を進めてきましたので、この辺りで本当に必要性が高まっているときにきちっとしたものにしていきたいと思っています。よろしく願いいたします。

○松井市長

ありがとうございます。これは、我々トップミーティング始めたときに、できるだけ前向きに、府市に跨る長年の懸案についても解決していきましょうということで、まさに今の頻発している、大規模火災に対する対応でもつながりますし、やっぱりこういう形で前向きに取組が進んだというのは、私は本当にありがたいと思います。御関係の皆様方にも御礼を申し上げたいと思います。

それでは、時間もありませんので、次のテーマに移りたいと思いますが、冒頭、このトップミーティングの成果の中で、12月20日の京都探究エキスポ2025のお話もいたしました。探究学習での府市連携の今後の推進について話題にさせていただきたいと思っています。

今回は安宅和人さんという私の元同僚でもあるんですが、基調講演をしていただきましたが、安宅先生も仰っていましたけれど、やっぱり、自分自身の興味関心と向き合っていて、答えのない問いを突き詰めていく探究学習への取組というのは、VUCAの時代とかいろいろな言い方をされますが、今を生きていく高校生にとって非常に意味のある学びの機会だったと思いますし、これからもそれは非常に重要だと思いますし、その取組は恐らく、高大連携、或いは中高大というふうにしームレスに学びを続けていく、そしてそれが、実社会でどんな活動をしていくかということにもつながっていく、非常に大きな、京都にとっても大事な課題だと思っています。継続的にこれが府市連携で探究学習への取組を進めていけるということは、大変我々から言うとありがたいことでありまして、いかに、今後、継続的にこの機会を深め、広げていくかということが大事だと思っています。

今後の方向性の1つとしてですね、いろいろ知事とお話をしている中で、例えば国際的な視野、今朝の話もそうですが、視野を持って京都と日本と海外を比較しながら、グローバルな探究活動に取り組める、そんな取組というのも大事だと思うんですけど、知事のお考えはいかがでございましょうか。

○西脇知事

今日午前中の、「トビタテ！留学JAPAN拠点形成支援事業」の採択状の授与式の

時にも申し上げましたけれども、やっぱり今の時代、非常に不確実性から更に混迷を迎えているという中で、本当に今後の京都とか日本を担う人材を育てていくためには、新たな価値を創造できるような尖ったものが必要になる。安宅和人さんの素晴らしい講演を20日に聞きまして、いかに、強烈な印象が残るような体験を、どれだけ数をたくさんするかによって、全然違う人生になるという話もされていまして。京都府では令和6年度から、高校生の海外探Q留学を開始して、これまで2年間で40名。7年度からは京都市も同じような事業で10名がということで、今日、高校生の皆さんが体験を発表されていましてけれど、まさにその新しい拠点形成支援事業という形で、文科省の方からも採択状を貰えましたので、国からも財政支援や助言が得られるということで、8年度からは、まさにそれを活用して、府市・産業界・大学が連携する形で「京の高校生海外探Q留学応援事業」を実施する。3年間で300名ということなので、これは本当に期間の長さを問わずですけども、海外に1人で行く、少人数で行くということで、素晴らしい人材育成につながるということだと思っていますので、今までの成果の京都探究エキスポも素晴らしいし、京都探究クエストもなかなか良かったと思うので、これは引き続き充実を図りながらなんですけれども、令和8年度の新しい要素としては、この国の事業の活用によって、海外留学の面で更なる府市連携ができないかというふうに思っておりますけれど、その辺についての市長のお考えをよろしくお願いします。

○松井市長

大賛成ですね、海外に行くと恐らく日本のことをいっぱい聞かれるんですよ。京都出身と言うと、京都のことをどれだけ知っているのかということ聞かれるし、日本の常識が、向こうでは常識ではなかったり逆もあったりして、ますます単に言葉が上手になるとか異文化を経験するだけじゃなくて、そこで自分たちのルーツは何なのか、京都ならではというのは何なのかということ、すごい大きな刺激、ショックを受けて帰ってくると思うんです。だから逆にそういう海外と国内を切り離さずに、海外に飛び立ったような人材が、京都ならではの文化というものを追求してもらわなければいけない、あるいは職人芸みたいなこと、伝統産業の技術みたいなこと、追求する1つの大きな刺激になると思うので、是非これ、2つの話を切り離さずですね、こういう海外に飛び立つ探究学習と国内の探究学習、車の両輪にして、今、知事が仰ったような、安宅さんが仰っていましたが、まさにちょっと人生の中でどれだけショックを受けるような、僕らの言葉で言うと目から鱗が落ちるような経験をいくつして、そしてそのことが次の学びの意欲につながると思うので、是非、今、知事が仰ったような形で探究学習の発展に、府市連携して取り組んでいきたいと思っておりますし、まさに、今回の話、知事が御尽力いただいて文科省から制度を取ってきていただいたので、まさに府市連携で、国とも連携して取り組んでいきたいと思っておりますし、また、学校や教育委員会の方々はもちろんなんですけれど、それだけではなくて、知事部局、市長部局、あるいは企業、大学、そう

いったところが、せっかく京都で学ぶのだから、その学校の校舎だけで学ばずにそこから飛び出して学ぶという機会を作っていたらありがたいかなと思っております。

それでは、今日の次の合意事項として、府市連携での探究学習の取組を更に深化させ、「京の高校生海外探Q留学応援事業」による海外留学支援を令和8年度から開始するなど国際的視座を持った次世代を育成すること、を探究学習の深化に関する本日の合意事項とさせていただきますようお願いいたします。

○西脇知事

ありがとうございます。1点だけ。これまで探究学習の時にですね、高大連携とか、高校生たちから、経済界からもですねアプローチ受けていまして、漠然と言っていたんですが、まさに今回のこの海外への探究留学は、京都経済4団体、大学コンソーシアム、それからこれは私立も入るので、公立から私立に広げるとか、いろいろ話の広がりですね、やる出発点になるので、漠然とやるよりも、まさにまずこの辺りから巻き込みをするということが現実的かな、と今も思っていました。

○松井市長

まさにその観点も含めて、しっかりと。それこそオール京都で、いろんな事業者であるとか学校もいろんな種類の学校も含めて、しっかり連携して取組を進めていきたいと思っております。

それでは、今日は鳥インフルエンザの本部が開かれたところでありますが、感染症という意味では、この人間のインフルエンザも、今、猛威を振るっております。感染症対策の拠点として府市連携で令和8年度設立を目指している京都版CDC、京都府感染症予防管理センター(仮称)について、西脇知事から御発言をお願いできますでしょうか。

○西脇知事

令和2年から新型コロナウイルスの感染が拡大したんですけど、オミクロンだ、デルタだ、いろいろ言っていたのですが、なかなかですね、ウイルスの特性の情報が国から来ない。また独自に情報収集と分析しようと思っても、リソースも科学的知見もないということで、タイムリーな政策・対策が打てなかったということがありました。いずれまた、絶対、感染症というのは波が何回か来ると思うので、都道府県と政令市が共同設置するような常設の感染症の専門機関としては、こういう共同設置が初めてだということで、令和8年の秋にはですね、この京都版CDCを立ち上げることにしたいというふうに考えておまして。これは行政が対策本部に助言をするとか、市民や府民の皆さんへの情報発信も一元的にやる、それから非常に困ったことがあったのは社会福祉施設や病院とかで、実践的な感染対策を専門家がそれを支援するとか様々な機能をちょっと想定しておりますので。

また、府立医大だとか、京都大学、地元企業、いろんな方が京都には、感染症に詳しい方もおられますので、そういったところの情報収集力とか分析力も高めるとか、それから地域の関係機関だけではなくて、国の国立健康危機管理研究機構とも連携したいということで、感染症の対応力を強化したいと考えていますので。さらに将来的な夢なんですけれども、他の都道府県に対しても一定の役割を果たせるような、要するに西の拠点になれるならいいなということもあるので、その辺りについて、市長のお考えをお聞かせただければありがたいと思います。

○松井市長

ありがとうございます。全く仰るとおりだと思います。私は大学の教員時代だったのですが、コロナ禍で何度も京都に帰って来ていましたが、当時、知事が本当に大車輪の活躍で、知事だけでなく、門川市長、それから京都の医療関係者がオール京都で本当に連携して取り組まれて、これはもう我が郷里は誇れる存在、まあそれどころじゃなかったの、日々大変だったとは思いますが、大変ありがたかったと思いますし、それは京都の誇りだと思います。府市協調の下で、オール京都で感染症対策に取り組んだことが京都は比較的、新型コロナウイルスを抑え込めた成功事例としていろんな専門家から評価が高い、その背景にはそういう努力があったと思います。

感染症の情報の把握収集、動向の分析、市民・府民への情報発信、感染予防・感染拡大防止支援等の取組、これはやっぱり広域的に取り組むことが絶対必要だと思うし、有効だと思う。そのためには府市連携を一層に強化していくことが重要で、まさにコロナ禍で一番御苦勞を重ねられて、一番連携を取り持たれた知事の今の御提案に全面的に賛同でございますので、それでは、今回のミーティングの合意事項として、将来的な感染症対策の西日本の拠点を目指し、京都版CDC、京都感染症予防管理センター(仮称)を令和8年10月に創設すること、を京都版CDCに関する本日の合意事項とさせていただきたいんですが、よろしいでしょうか。

○西脇知事

ありがとうございます。いろんな準備のためには、さまざまなハードルがあるんですけども、頑張って設置するように御協力をよろしくお願ひしたいと思います。

○松井市長

こちらこそ、よろしくお願ひします。

それでは話題は変わりますが、北山のエリアのまちづくりについて今日話題として取り上げたいと思います。北山のエリアというのは、私と知事は似た世代ですが、私どもから言うと上(かみ)の方、知事は下京で私は中京ですから、上(かみ)の方の素晴らしいエリアとして憧れを持って、あそこでちょっと文化的な体験をしてみたいと思う憧

れの地であったわけでありますが、まさに北山のエリアには植物園があって、府立大学があって、今でいえば京都学・歴彩館があるなど、基本的に京都府が全体的にランドオーナーとして諸施設を運営されているエリアであるわけでありますが、この北山エリアについての知事の思いを伺わせていただいてもよろしいでしょうか。

○西脇知事

仰るとおりで、駅前生まれ育った人間からするとですね、非常に自然環境が豊かで、多くの公共施設も集積しておりますし、文化と憩いの空間ということで、本当に府民の皆さんが文化を身近に感じられる場所になっているんじゃないかなと思っております。今、旧総合資料館跡地に舞台芸術とか視覚芸術の拠点施設を整備することを検討しております。今年10月から暫定的な活用ということで、官民連携事業で公園型の複合施設を整備しております。そのオープニングで京都市交響楽団に演奏いただき、天気は悪かったんですけども、オープニングを彩っていただきました。なかなか生の演奏は迫力があってよかったと思っていますけれども、本格活用ではコンサートホールをはじめとする北山エリアから素晴らしい文化芸術を創造・発信させたいと思っていますし、将来、更に魅力ある空間・エリアにしたいと思っていますので。ただ、地主としては京都府が手綱を持っているんですが、京都市の都市計画を含めて、まちづくりとの関係も非常に深いものですから、関係者を交えた会議体のようなものを設置したうえで、関係者と一緒になって議論ができれば良いなと思ってるんですけど、その辺りについて、市長の御意見を伺いたいと思います。

○松井市長

ありがとうございます、御配慮いただきまして。私、京都市交響楽団の楽団長も無給でやっているものですから。無給は冗談ですが、名誉職でやっているものですから、大変、有難いです。京響は本当に今、素晴らしいレベルになっていて、私はいつも言うのですが、あれだけ自転車がコンサートホールに並んで、素晴らしい日本有数のレベルのコンサートが展開されているというのは日本に他にないと思います。それだけ市民から愛されているということだと私は思っていて、音楽の拠点を、是非、北山のエリアに、有機的にこれから北山エリアの再整備をされる中で位置付けていただいたら、我々から言うと京都市交響楽団も、あるいはそこに集う音楽家から見ても大変有難いというふうに思います。

折しもコンサートホールも30周年に、それから京響は来年で70周年ということもあって、これからコンサートホールの大規模改修にも取り組むということで、今、基本設計に着手しているところでありまして、これを機にですね、音楽を通じた多様な人々の交流、あるいは将来の担い手育成を通じてですね、知事が仰る北山エリアの文化交流拠点化をしていきたい。これは京都の音楽の都にしたいという、私の元々の市長選に出

るときの思いもありまして、新京都戦略という私のプランの方にも位置付けさせていただいているので、是非、あのエリアを音楽も含めまして、更に幅広い方々、地域の方々、文化芸術の関係者、まちづくりの専門家から広く意見を伺う会議体を設置いただいて、北山のまちづくりについて議論を深めていきたいと思っておりますし、私は北山が音楽で溢れるようなですね、私がいつも言うのはコンサートホールに高い値段でチケットを買って下さる方々、物凄くありがたいですが、その方々だけではなくて、あのホールを開きたいんです。ですから、あそこでの練習環境を整えたいと思っておりますし、リハーサルをできるだけ、公開のリハーサルを多くして、あるいはちょっとした音楽がそこに溢れるような、ちょっと先程、旧資料館跡地でのオープニングに呼んでいただいたような形で音楽に溢れるようなまちをつくっていきたくて思っておりますので、是非、その辺りも含めて、これからの京響がどんな形で、あそこでリハーサルするのかということも含めて、その京響の音楽、あるいはそこに集う音楽家にとって、あるいは京都はアマチュアの音楽家も多いですから、そういう方々も含めて、あのエリアが音楽に親しみやすいまちづくりをしていただいたら大変ありがたいと思っておりますし、我々も一緒に汗をかいていきたいと思っておりますが、いかがでしょうか。

○西脇知事

我々地主としても極めて貴重な空間で、植物園も去年100周年を迎えて今、「LIGHT CYCLES KYOTO」とかいろいろな活用についてもだいぶ進展もしているので、是非とも、できる限り幅広く意見を聞くということで、一緒にやっていければいいと思っておりますので、よろしくお願ひしたいと思っております。

○松井市長

ありがとうございます。では、今仰ったような、まちづくり、地域や専門家の意見を広く聞くための会議体を設置するという事は、今後に向けての合意ということにさせていただきます。

いろいろな議論をしましてまいりましたが、今日の議題の最後、もしかしたら諸々あるかも知れませんが、フリートーキングですね、前回のトップミーティングでも議論をさせていただいた京都の価値・魅力の源泉の磨き上げについて、引き続き議論をさせていただきたいと思うのですが、知事の方からまず御発言をお願いできますでしょうか。

○西脇知事

前回のトップミーティングの最後に、あの10分間くらいやりとりをさせていただいたのですが、やっぱり京都の魅力というのはいろんなことがある。だからその魅力の源泉の磨き上げが十分に行われているのかという危機感を基に、これからも京都が京都として在り続けるために、オール京都で取り組んでいく必要があるということは前回共有

できたんですけれど、改めて申し上げれば、本当に観光客だけじゃなくて、一流の学者だとか、研究者、文化人、芸術家、企業経営者とかが京都に来るという、なんかこの魅力をとということで、それはもう語らないですけど、自然とか文化とか、知の集積とか、先端産業とかいろいろあるんです。しかも、それを支えているのは、ほんまもんが分かる審美眼なり、気概を持っている、府民の皆様だということで、その辺り京都市内だけじゃなくて、私の立場にすれば、府域全体で、そういうような京都の力があると。

前回、オーバーツーリズムの話がこの磨き上げの話で出ていて、観光メインで入ったためにですね、オーバーツーリズムが話題かなと思われたかもしれないですが、実は別にこの問題の本質はオーバーツーリズムだけではなくて、いろんな魅力を形づくっている、いろんな要素がそれぞれについて課題があるんじゃないかということです。

折しもですね、そういうトップミーティングの後に、先日、京都商工会議所の方から、正確に引用すると「経済界に並びにアカデミアと行政が協働して、都市の戦略を議論する産学官が連携した「協議会」の設置」ということについての要望があったということで、これは、元々多分経済界も思っておられたというのと、私と市長が話をした課題認識と全く軌を一にしていると思いましたので、これを一緒になって取り組むということについて、市長の見解をお伺いしたいと思っております。

○松井市長

はい、ありがとうございます。今日、時間があつたら、基本構想の話も触れたいと思うんですが、基本構想のときにまさに京都商工会議所の会頭である堀場厚さんから、メンバーとしていろんなことをオール京都で議論したいと言われておりましたので、京都商工会議所さんの今回のお申出というのは、知事と全く同じで、我々と同じ気持ちで、我々からも、もちろんお願いしたいと思っていたぐらいの話だと思います。

京都が抱える社会的な課題あるいは本質的な、本源的な課題に今、京都は直面していると思うんです。知事が仰ったように、観光の問題もその1つだと思うんです。ただ、観光の問題に限らない問題があつて、私は、長年京都を愛してくださるファンベースはすごく大事だと思つていて、これは私の友人の佐藤尚之という人が、また新しい本を書きましたけれど、長く愛される京都であつてほしいし、本当にコアなファンを大切にす京都でなければいけないというふうに思うので、京都をずっと長く、繰り返し愛してくださっている方、コアな京都ファンの皆さん、観光というレベルじゃなくて、この分野では京都にあるこれが大好きで、といういろんなテーマコミュニティのファンが京都についてはいらっしゃる。それを大事にできるまちでいなければならない。

京都基本構想の議論の中で、若い人たちが、むしろ「0.1市民」、この構想は誰に向けての構想ですかといったときに、京都に住所がある人だけの構想じゃないですよ。京都っていろんな人たちの憧れのまちなんです。いろんな分野の達人がいる、職人がいる。そういう方々にとっても愛すべき京都をどう守るかということで書いてくださ

いというのが1番多かった若者の意見なんですね。そういう意味では、京都の魅力が今どういうふうになっているのか。ひょっとしたら失われている部分があるんじゃないか、あるいは非常にこれは高まっているという分野もあるかもしれない。それを、ほんまもんの値打ちが何なのかということをお大切にすまちをつくっていく。そのための課題、あるいは将来の更にここを深掘りすべきだということについて言うと、経済界も含めて府市、オール京都で確認して取り組んでいきたいと私は思っております。

○西脇知事

はい。多分、魅力は多彩なんで、置かれている状況というのは、これ分析しないといけないと思うんですけど、私は知事就任以来ずっと言っている、我が国の最大の課題は人口減少と少子高齢化だと。実は人口が増加していくとか安定成長の時は放っておいてもですね、需要が高いから、どんどん担い手が確保されて、労働集約型でも優れた価値が生まれてきたのですが、これほどのはっきりした人口減少局面だと、なかなかそれがうまく回ってないんじゃないかなということ、魅力の源泉の心配の中には、やっぱり人口減少があるんじゃないか。要するに担い手がなかなか確保できないんじゃないかという。それが過去の人口増加を前提としたシステムだけではなかなか解決できないんじゃないかということで、そういうところもその価値の磨き上げの中から、担い手という観点から、分析するのも有効な手段かなと思っていますけれど、その辺りについて、市長の考えをお聞かせください。

○松井市長

はい、まさにそうだと思います。人口減少も大事な課題で、ですから、さっきの学生たちの、いろんな京都の体験は、それぞれの人生には影響はあると思うんですが、そこを他のまちにそのまま戻ってしまう。あるいは、他のまちに職場を求めてしまうということを、何とかもつと京都に引っかかってもらおう、京都で何か活動してもらおうということが最初の合意事項でもあったと思うんですが、同時にですね、私は関係人口的な考え方、仮に京都に住まなくても、やっぱり京都にほんまもんの価値があるから京都に学びに来たい、来続けたい、月に1回は京都に来て、ある学びをしたいというような方とか、私が知っている女性なんかは月に1週間、自分の職場でですね、オンラインで仕事しながら、京都で1週間仕事しながら、朝昼晩ご飯を食べたり、あるいは土日を有効に使って、京都のいろんな場所を散策するという人もいらっしゃるんですが、いろんな関わりが、京都への関わりがあると思うんですね。

なので、そういった方々の京都でいろんな物事を追求したい。そのことは、京都で子育てする時に多少地価は高いかもしれない。公園の広さだけを競えば公園の広さでいうともっと広い公園を持っているまちはあるかもしれないけれど、やっぱり京都のまちにこんな学びがある、こんな交流があるという機会をたくさんつくっていきたい。これは

京都基本構想の中で私自身も一番思い入れがあるのが京都学藝衆構想で、しばしば誤解される面はあるのですが、一部の高尚な御家元であるとか、ノーベル賞の科学者とか、もちろんそういった方々は学藝衆なんですけど、私が考えたいと思っているのはそういう方々も含めて、そのお弟子さんであるとか、あるいは私が声を大にして言いたいのは、京都にたくさんいる職人さんたちですね。有名な職人さんもいらっしゃれば、無名な、例えば造園業の中で働いている、本当の一介の職人さんであっても、庭造りにかけての思いたるやすごいというような人がいらっしゃるわけです。そういった方々に、もっと京都の若い人たちが学ぶ機会をつくっていきたい。で、その学ぶつながり。職人さんに学ぶ。学ぶ人がまた次の世代の人に繋いでいく。で、子どもたちだけが学ぶんじゃなくて、親御さんとかあるいは私どものような高齢の人間も一緒になって学びをつくっていく。そのことは実は、後継者不足に悩む職人さんから見たら、自分はもう後継者がいないかなと思ってたら、意外と若い子は目を輝かせて自分の仕事の話聞いてくれる。そんな人たちにとっての出番づくりにもつながると思っておりまして、私自身としては京都学藝衆、要するに京都の教え合い、学び合いのコミュニティみたいなものをどういうふうに、今もあるんですが、それをどう活性化して、そして更にそのつながりの輪を広げていくかということをしつかりやっていきたい。今、申し上げた学問、芸術、文化に留まらず伝統芸能とか伝統工芸とか建築、庭園、地域のお祭り、あるいは郷土史についてめっちゃくちゃ詳しい人。あるいはスポーツ、武道、ニュースポーツなんかもあるかもしれない。その幅広い方々、匠、あるいは語り部、地域の方々が交流する、そして学び合うようなものをつくっていきたい。そこについて私は、腰を据えて取り組んでいきたいというのが私自身の京都学藝衆への思いで、ここら辺については知事にも時々お話をしているところですが、こういうことをうまく府ともコラボしてですね、取組を進めていけたらなと。

○西脇知事

京都学藝衆の話は、私は市長に代わって喋れるぐらい聞いてますので、大丈夫でございますが、まさにそれはやっぱり学び合いとか教え合いというので、先ほど言いましたように、やっぱり担い手、所詮、皆さん人間がやっていることなので、ここをちょっと押さえておかないと、価値の磨き上げができないかなと思います。で、そのうえでちょっと視点を変えて、少しお話しさせていただいて。

観光の例だけで言うと、トップミーティングの成果の中に「まるっと京都」ということで、あの周遊観光ということでやりましたし、これは実は単に周遊させるだけじゃなくて、我々としては、元々やっていた「もうひとつの京都」という、新たな魅力とか価値を見出そうというものとも連動させていただければ、一番ありがたいなというふうに思っているんですが、そうした中で、若干、最近、修学旅行が、今年は万博との兼ね合いがあったかもしれないですが、修学旅行が、今まで京都はリピーターをつくるうえで

も、かなりの価値を出したんですが、ちょっと最近減ってきているんじゃないかという危機感もあるんです。一方で、探究学習ということでは、そういう観点で修学旅行が再注目されているという話も聞くので、もうちょっと修学旅行のプログラムに対して、我々がいろんなことに関与することによって、単に観光誘客ということじゃなくてできないかと。それは次世代の京都ファンづくりにもなるというふうに思っていますので、それが1点。

もう1つは、京都の中で公物管理という中で私どもが一番大きい役割を果たすのがやっぱりなんといっても鴨川で、この前の鴨川4も。鴨川は元々やっぱり暴れ川で非常に大変だったという形の中で、いろんな役割があるんですけど、やっぱり京都を訪れる方々と、それからもちろん京都の人にとっても、賑わいになり潤いを生む河川空間にしたいなということなので、例えばなんですけれど、京都府が管理してる鴨川の河川空間と京都市が管理してるような、当然まちづくりの観点での歩行者の空間とか公園とかあるんですよ。で、実は川というのは危ないので、親水性と安全性との狭間があるんですけども、まちづくりとできる限り一体的にできないかとか、そういう意味では、その典型例としては、高瀬川だとか京都駅周辺などの鴨川の周辺エリアとの回遊性を高めるというようなことも、検討できればいいかなということで、まだアイデア段階ですけども、私自身は京都駅前に住んでいましたので、あの鴨川の近くで育ったということもありますんで、是非そういう部分も検討していきたいなと思っていますね。

○松井市長

いや素晴らしい。やっぱり京都といえば鴨川だと言うと、ちょっと桂川流域の人は気を悪くされるかもしれませんが、やっぱり京都で学ぶ大学生が鴨川のところに河原にね、ぽつんぽつんと座って、あそこでデートする、あるいは、友人と語らうっていうのが、本当に象徴的な青春ですよ。で、本当に鴨川について触れていただいてありがとうございます。これは知事が仰ったように、我々、例えば菊浜のエリアでも随分高瀬川、寄付もいただいて、あの川の流域でまちが変わりつつありますね、今。あそこは、アーティスト・インレジデンスのような地域にしたいという野望があるわけですが、そこはまさに鴨川と高瀬川に挟まれたエリアでありまして、そこに新しい文化が今芽生えてるような気がして。鴨川を、特に、今日、下京から鴨川を見ていただいた知事から鴨川について触れていただいたというのは、大変、私にとっては嬉しい話ですし、これはまちづくりとして京都市ができることを一生懸命、我々も知恵を出し、汗をかきますし、今、仰っていただいて大変ありがたいと思います。

それから観光。これも仰るとおりだと思います。まさに今、知事が仰ったような視点です。学び、修学旅行の生徒さんがちょっと減っているというのは、私も実家からの情報もありますので、すごく体感的に分かっているんですが、やっぱり京都の入口なんです。その部分が、いろんな、時間が読めないとか、いろんなこともあって敬

遠する向きがあるとしたら、この京都の入口として京都に観光旅行に来ていただく、あるいは私はもっと言えば大学生なんかでも、もっと京都の入口ですね、東京の大学生なんか京都に来ていただいて、一定期間研究していただくとかいうのもすごくいいと思うんです。そういうことを何か促していけるようなプログラムを府市で連携してつくることができれば、大変ありがたいと思いますし、時間の関係を気にして仰らなかったかもしれませんが、やはり例えば、我々が、京都学藝衆の話もしましたが、京都市内だけで学藝衆が留まるというわけではなくて、例えば、西陣織1つとってもやっぱり丹後の産地とどう連携していくかという、やっぱり京都府ワイドで物事を見ないと、やっぱり京都の文化というものも語れないと思いますので、その辺りも含めて、しっかりお話はできていくとありがたいと思いますし、伝統産業に関して言うと、この前の伝統産業対話会で、非常に知事と一緒に良い議論をさせていただきました。グローバル展開とかを視野に入れてくると、骨董品としての伝統産業じゃなくて、それが世界の美の視点から見てどんなに素晴らしいものか、あるいはそれがどんな展開の可能性があるかということを知って若人たちに知ってもらって、それをもう1回、その若人たちの目で、あるいは、グローバルな感性を取り入れて伝統産業というものを発展させていきたいと思ひますし、やっぱり販路開拓というのもとても大事だと思います。

特に今お話があった、観光・修学旅行の問題は、これから宿泊税もこの3月から更に使っていただくようになります。その使い道をしっかり京都の観光にとつてもつながる、あるいは、京都で学ぶということにもつながるという意味でもしっかりやっていきたいと思ひますし、まさに鴨川の話は、河川空間、我々、公共空間をどう再利用、利活用するかということが全体的なテーマで、これは公園もそうだし、まさに鴨川というのは公共空間の最たるもので、あれは京都府の大英断で床というのがあの様に制度化されて、あれはもうまちづくり、アーバニストから見たら、よくそんなことやったなというような歴史的な事例なんですよ。ですから、鴨川に知事が着目していただいたっていうのは、これはいろんな今後の府市トップミーティングとしてもいろんな形で取り上げていけるようなテーマではないかなというふうに思ひます。是非、我々自身も取り組んでいきたいと思ひます。

その関係で1つだけ、水つながりですね、最近、焚き火ミーティングをやって寒かったですよね、あれね。その後、知事と一緒にそぞろ歩きしながら、市役所の近くの銭湯に知事に覗いていただいて、これは、京都府の組合の話ですから、むしろ京都府のフランチャイズエリアに私が一緒に入り込んだ。そこで湯道ということもあって、今シールを貼るスタンプラリーみたいな取組をやっていて、すごく好評で、皆さんが銭湯に着目してくださっているんですよ。で、我々自身もそのキャンペーンもやってますし、ボイラーの改修支援なんかも補正予算で付けさせていただいたんですが、地域の交流という意味でも銭湯の素晴らしさというのものもあるし、健康にとつても私はいいように思ひますね。何より若い子どもたちが、あまり銭湯に今行かないんですね。だけど、いろん

な意味で小山薫堂さんなんかは、銭湯に行く子どもたちの学びの場になるんですと。いろんなことをあそこで教わる、大人も子どもも、お年寄りもみんな一緒の場なんです。みたいなことがあって、銭湯実際に行かれてみて、知事もなんか反応あったんじゃないですか。

○西脇知事

市長と私と銭湯の御主人と写真を写して、私もう完全に風呂に入ったと思われていましたけれど、実は入口で帰ったんです。市長はその後に入り直しに行かされたんですが、見直されてるところがかなりあります。外国人観光客の方の需要というのも増えているところもあると思うんですけれども、1つの文化としてできる限り。ただ大人になってもですけれども、私は小学校1年生まで、うちに風呂がなかったんですね。当然大学生の下宿の時もお風呂のないアパートにいましたんで、銭湯には行っておりましたけれども、好きだったんですよ。最近、知事になってから、行く機会がほとんどないんですけれども。若いときから経験するのは、1つの文化としていろいろなつながりができますのでいいんじゃないかなと思います。

○松井市長

はい。またそういうことも、今後のテーマの1つとして考えていただけたら面白いかな、特に子どもたちもね、やっぱり子育て環境日本一のまちをつくっていくって意味でなかなか面白いテーマかなと思ったりはしました。ちょっと焚き火と水でつなげて、ありがとうございます。

フリートークはこれぐらいにさせていただいて、最後の本源的な課題というのは、伝統産業にしても観光にしても、それぞれ重要なテーマだったと思いますし、しっかり取り組んでいきたいということを申し上げて、それから鴨川ですね、それも含めてしっかりまちづくりを、府市協調で取り組んでいきたいと思うわけであります。

今日の合意事項を確認しておきたいと思います。もう中身はいちいち申し上げません。

合意事項が5点あったと思います。奨学金返済支援制度の拡充が1つ。それから、消防体制の強化が1つ。それから、探究学習の深化が1つ。これどっちかという海外留学という面を中心に深化させようと思いますね。それから京都版CDCが1つ。それから北山エリアの再整備に向けての会議体の設置というのが1つ。以上5点の合意事項を今日確認させていただいたと思いますが、知事から何かございましたら。

○西脇知事

最後のテーマのフリートークのときに、冒頭の後で申し上げましたけれども、経済界の方から、経済界とアカデミアと行政とですね、オール京都で、協議会のようなものを設置するという要望も来ておりますので、これも1つ非常に重要な提案だというふう

に思っておりますので、これをどうされるかというのは経済界も含めて、これからの御判断だとは思いますが、やっぱり行政だけでやっているというものは、あまりなくてですね、やっぱりオール京都で取り組むということが特に最後の点については必要じゃないかなというふうに思っておりますので、よろしく申し上げます。以上です。

○松井市長

ありがとうございます。そういう意味ではですね、この府市トップミーティング、この2年間で各3回やってきましたけれど、考えてみたら、府市でやれる取組というのが基軸になりながら、それに国を巻き込むとか、あるいは、今の話は経済界も含めて一緒にやろうとか、あるいは、他の自治体ですね。さっきの消防体制とか、CDCについて言うと、まさに他の自治体、場合によっては西日本の1つの拠点になっていくという意味では非常にこの6回の中で、それぞれの個別のテーマの成果とか、あるいは、今の進捗というのもさることながら、府市トップミーティングがきっかけで、府市だけじゃなくて、その外側にも広がりがでてきたなというふうにも思いますので、2年間これで終わりじゃなくて、これからも続けていかなければいけないわけですが、私としては、知事に特にこの2年間、時に私の無茶振りに、見事それをちゃんと返していただくというか、それに倍返しで「それやったらこんなことをやったらどうだ」というようなことをいただいたりして。本当に今年度も3回、昨年度も3回やりましたが、大変有意義な議論をしていただいたことに改めて、知事や京都府の職員の皆さん方にも感謝を申し上げますし、また市役所の職員の皆さんにも、非常に柔軟に受け止めていただいて、そして、府市それぞれが、事務方が連携していただいたことに、この2年間、今年度はこれがトップミーティングの最後になるかもしれないですが。もちろん、何かあったらですね、これは、随時、機動的にやろうということですので。今後とも、そんな形で、府市協調で、弾力的にこの枠組みで、場合によっては経済界であるとか、いろいろな他の自治体の取組とも連携しながら、京都がよりよいまちになっていくように努めていきたいと思っております。ありがとうございました。